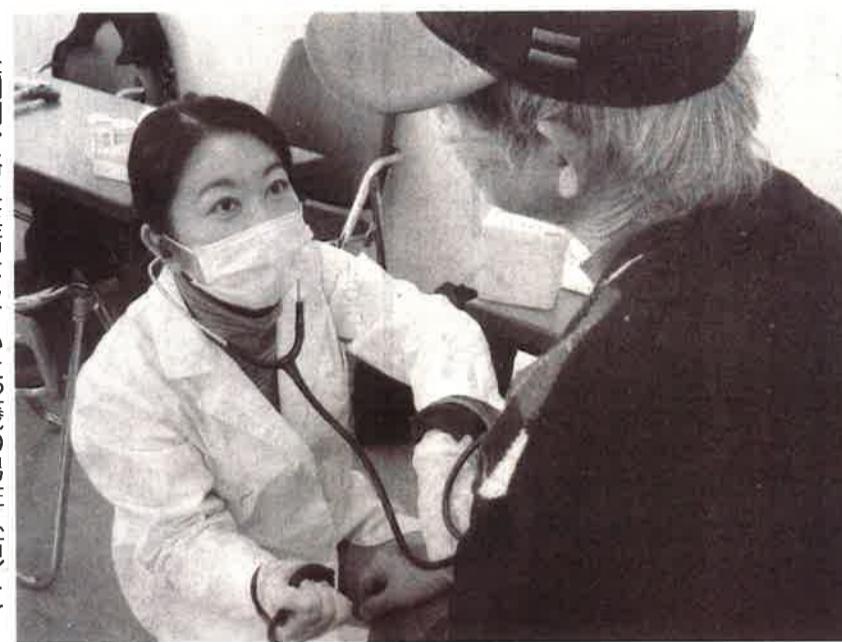


森絵都さん

高齢ホームレスを巡回支援



長期間、路上生活をしていた62歳の男性（右）に話す。全身の健康状態をチェックする看護師
（左）は、広島市で

悩む思春期に作家が工ール

「10歳の質問箱」と「続10歳の質問箱」

年10月に行なった全国実態調査では、ホームレスの平均年齢、長期化の傾向は全國に共通する。厚労省が16

歳で、毎月巡回する医師の大脇甲哉さんは「全国的にホームレスの人数が減ってきた中で、今も路上に残されている人は、心身に問題があるケースが珍しくない。いかに信頼関係を築き、息長くケアできるかが鍵です」と話す。

「10歳の質問箱」が話題



路上に段ボールを敷いて横になっていた男性（左）を診察する医師の大脇甲哉さん（右）は、東京都台東区で

山田洋次監督ら3組を表彰

受賞会見で「地元の小学生が今作の感想を『すごく面白かったよ。才能あると思うよ』と言つてくれました」と喜ぶ山本悦子さん



画と作らねばならない映画が重なっている場合に、いちばん良いものができます。今だからこそ、それができるんじゃないかな」と述べ、「本を読んで解決はしないかもしれないけれど、読書は心を耕す作業だと思います。この本が心の栄養になってくれたらと思っています」

高齢化しているホームレスを支援するため、厚生労働省は来年度から、看護師など医療の専門職でつくるチームが、地域を巡回する事業を各地で始めるに冷え込んだ11月下旬の方、防寒着に身を包んだ看護師や医師ら4人が、ホー

ムレスの人々がいる公園や路上の見回りを始めた。「体調、どうですか」と一人一人に声を掛け、血圧を測る。5分程度のやりとりの後、「良かつたら相談に来てください」と呼び掛けた。

これは東京都台東区が、路上生活が長い人をケアした取り組みが、厚労省の新事業のモデルケースと言えそうだ。

この日、声を掛けたホームレスは35人で、多くは60～70代。事業を受託するNPO法人「山友会」の理事長で、毎月巡回する医師の大脇甲哉さんは「全国的にホームレスの人数が減ってきた中で、今も路上に残されている人は、心身に問題があるケースが珍しくない。いかに信頼関係を築き、息長くケアできるかが鍵です」と話す。

厚労省が医療チーム補助 細かいケアで路上脱出を

くらしのページ

FASHION
EDITION
EBOOKS
Others

「子どもの力信じる」

のチームによる巡回を想定しており、実施する自治体にて人件費の一部を補助する。

大脇さんは「医療職が、実績のある地元の支援団体とうまく連携すれば、比較的スマートに巡回できるのではないか」とみている。

広島市内では、慢性疾患に詳しい看護師らのグループが、広島県社会福祉士会などと協力。06年からほぼ毎月行う巡回事業。こうして取り組みが、厚労省の新事業のモデルケースと言えます。

厚労省の担当者は「従来の施策だけでは必要な支援に結び付きにくい。もっと濃く関わっていく人材を確保したい」と説明。新事業では、保健師や看護師、精神保健福祉士など2、3人話す。

森山美知子教授は「重症化して救急医療や入院が必要になれば、国の医療費の増大にもつながりかねない。医療機関につないでいる。当初から関わる広島大

学校教員として約20年間勤めた教員の仕事と並行して児童書を書いており、「子

どもたちも新作を読んで楽しんでくれたという。深刻な状況にいる作中の子どもたちは身近な大人に苦しさを訴えられず、一方が少しでも役立てたいと思います」と話した。

同作では、小学校で複数の児童がこつぜんと姿を消す「神隠し」が起きたことをきっかけに、一見普通に

見で「私は子どもの力を信じています。苦しさの中に立ち止まっている子たちが動きだすエネルギーに、本

の大人も頼りない。「神隠し」をきっかけに、子どもたち自身が現実を変えようとして行動することで、大人も変化していく。

「どんなに苦しい場所にいても、少し見方を変えて、そばにいる人と話したり手をつないだりしてみたり手をつないだりしてみて。何か動けば、光が見えるかもしれません」と、悩んで生きる子どもにアドバイス。「本を読んで解決はしないかもしれないけれど、読書は心を耕す作業だと思います。この本が心の栄養になってくれたらと思っています」

「10歳の質問箱」（右）と「続10歳の質問箱」

と「10歳の質問箱」（左）

と「続10歳の質問箱」

受賞会見で「地元の小学生が今作の感想を『すごく面白かったよ。才能あると思うよ』と言つてくれました」と喜ぶ山本悦子さん

並河靖之七宝展

明治七宝の誘惑 - 透明な黒の感性

協・後主
開館時間
賛・援・催

伊勢新聞社の本
好評 発売中!

ことのなかった私の経験。
日本のみなさんに伝えたいと思う。』

ニクドゥーセ、

著者

平成
10月

(第3種郵便物認可)

ホームレス巡回支援へ

高齢化しているホームレスを支援するため、厚生労働省は来年度から、看護師など医療の専門職でつくるチームが、地域を巡回する事業を各地で始めることになった。長期間、路上で暮らす中で、疾患や障害など複数の問題を抱える人も目立つ。関係者は「きめ細かなケアを継続的にできれば、路上から抜け出せる人が増える」と期待する。

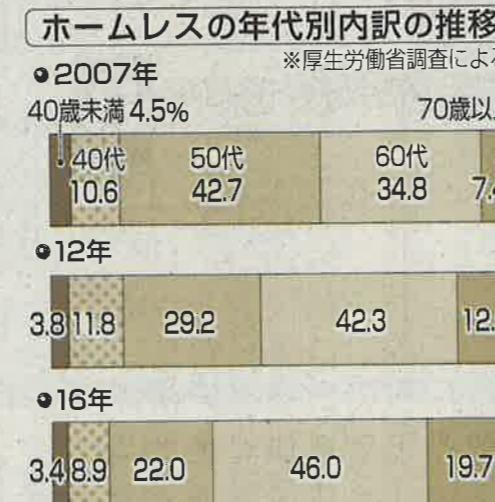
冷え込んだ11月下旬
事業のモルケースと
夕方、防寒着に身を
なんだ看護師や医師ら
この日、声を掛けた
言えそうだ。

ホームレスは
多くは60~70

来年度から厚労省 医療チームがケア



長期間、路上生活をしていた62歳の男性=右=に話し掛け、健康状態をチェックする看護師(広島市)



厚生労働省による全国調査では、ホームレスの数は2003年の2万5296人から減る傾向で、17年は4534人。ただ近年は減少幅が縮小している。長期間、路上で生活する人には、血圧や血糖値が異常に高いケースが少なくない。森山美知子教授は、その原因として、屋外で過ごすストレスや、頻度・内容に偏りが大きい食事、アルコールの摂取などを指摘する。保護施設やアパートに入居しても、孤立したり生活上の問題を解決できなかつたりして、再び路上に戻る人もいる。

当初から関わる広島 大学院医歯薬保健学 研究科の森山美知子教授は「重症化して救急 医療や入院が必要になれば、国の医療費の増 大にもつながりかねない。保健指導や病気の 早期発見をしながら、路上から抜け出せる道 を探っている」と話す。

大脇さんは「医療職が、実績のある地元の支援団体とうまく連携すれば、比較的スムーズに巡回できるのではないか」とみている。

広島市内では、慢性疾患に詳しい看護師らのグループが、広島県社会福祉士会などと協力。06年からほぼ週1回、ホームレスの全身状態を診断、必要に応じて医療機関につないでいる。

「何か動けば光見える

異聞

・あけぼの

えらかった

優ししまなざして人と人の絆を描いた映画 「惑う After the Rain」



昭和の家族愛描

の 中で家族の絆を描いた映画「惑う After the Rain」(2016年)が17日、四万十市右山五月町の市立中央公食館で上映される。

昭和55年冬、石川いづみは結婚式を翌日に控え、勤めていた信用金庫を退社する。20年前に父が亡くなり、女手一つで家計を支えてきた母イトはその晩、ずっと胸に抱いてきた思いを語るのだつた――。

物語は、養子として石川家に入った父の幼

幼かつた時代などを行き来しながら、血縁に紡がれる家族の愛情かかわらず多様な形でや、女性が生きる上でぶつかる困難を描く。

静岡県三島市が舞台。石川家が暮らす日本家屋や夕暮れの河川敷など、趣ある三島の風景が作品に奥行きを与えている。監督は、2003年から各地で市民参加型映画を手掛け、地域づくり総務大臣賞などの受賞歴がある林弘樹さん。企画やエキストラ出演、上映など一連のプロセスで

した。米国の「ユニバーサル多文化映画祭」でグランプリを受賞。いづみ役は佐藤仁美さん、母役は宮崎美子さん。

< 5



歯周病の原因
30歳を過ぎたら歯菌
した歯磨きを始める
の原因であるネバネ
細菌の塊で、食べ物の
て増えます。

